

この魚はどこから？

松本侑壬子・ジャーナリスト

日本人は魚を好む。とはいえ、今自分で魚を丸ごと調理できる人はどのくらいいるだろうか。大抵は、スーパーで切り身を買ってくるのが実情だ。味噌漬けや西京漬けになったその切り身の魚はどこから来たのか？なんて、気にする人は稀だ。さあ、そこで、この映画を見て私たちは眼をおき、ドキリと胸を押さえることになる。遠いアフリカの深刻な問題が、根本のところまで日本にもかかっている。どころか、何も知らないままに自分も経済的・環境的にグローバリズムの輪の中でアフリカ収奪の側に立っているのではないかと。

この映画は、オーストリア生まれのF・ザウパー監督が、1997年にアフリカ奥地で別の映画の撮影準備中に目撃した奇妙な風景が制作のきっかけになった。飛行場に並ぶ2機の巨大な飛行機。一方は近くの国連キャンプの難民のために食料用豆をアメリカから運んできたところで、他方は50トンもの新鮮な魚を満載してEUへ向けて飛び立って行った。飛行機のロシア人パイロットたちが驚くべき事実を語る。「コンゴに運ぶのは、人道物資だけじゃない。戦争に必要な物は何でも運ぶよ」。実際、紛争地コンゴへ「戦車のようなもの」を運んだこともある、と。同じ飛行機が、難民の救援物資と彼らを殺戮する武器を運ぶ皮肉な現実。ザウパー監督は“闇の奥”に踏み込むことに決めた。

人類発祥の地、アフリカ・タンザニア。この地にあるアフリカ最大の湖ビクトリア湖では、かつては多くの生物の進化と多様性の宝庫として「ダーウィンの箱庭」と呼ばれていた。半世紀ほど前に、ちょっとした試みからこの豊かな湖に一匹

の巨大な魚ナイルパーチが放たれた。大食で肉食魚のナイルパーチは、たちまち在来の魚たちを食べつくし、猛烈な勢いで繁殖した。その白身の肉は癖がなく加工もしやすく、たちまち“金になる魚”として主にEUと日本への輸出の目玉になった。

湖のほとりには魚の加工、輸出の一大魚産業が誕生した。魚を輸出先へ運ぶパイロットたち、彼らを相手の売春婦たち、農村からやってきて漁業キャンプをつくりナイルパーチを獲る漁師たち。しかし、船を買う金がないから稼ぎは知れている。次第に貧困がはびこり、エイズが広がり、病気で動けなくなる者が増える。

貧困の悪循環の中で、カメラは個人としての人間たちに向き合う。漁業キャンプの牧師は女性らに「売春はやめるように」と訴えるが、コンドームは勧められない。「神に従えば、コンドームも罪だから」だ。輸出用の切り身を取った残りの魚の頭や尾や骨などの残骸を業者がトラックで一カ所に集め、焼いたり揚げたりして地元民はそれを食べる。残骸の山から噴き出すアンモニアガスで眼球が落ちてしまった女性も登場する。いつかIT技術を学ぶためにと資金を貯めていた売春婦が客に殺され、子どもを学校に行かせたい警備員は「戦争があればいい金になる。皆、戦争を望んでいる」とつぶやく。このままでは救いようのない現実…。

ナイルパーチのおかげですっかり生態系が破壊されたビクトリア湖では、ナイルパーチそのものも生存を脅かされている。日本では数年前まで切り身は“白スズキ”の名前で流通し、今も給食やレストランなどでよく使われているという。



記録映画 仏・墺・ベルギー合作 (112分) / フーベルト・ザウパー監督

『ダーウィンの悪夢』

12月23日よりシネマライズ (東京) ほか全国にて順次公開

